曉山集序

誹諧曉山集目録

一 連歌ならざる事 春時代ならざる句

二 誹諧歌の名別なる事 春連歌誹諧歌句跡なし

三 面八句なる事 春十句なりの答

四 種ニの表句を歌とする事

五 脇の句五ツなりと云ふる事 春表句なり

六 第三の句 春稍なり句なりと云ふ事

七 四句めより八句迄 春八句なりと云ふ事

八 九句め以句を云ふ事

(九) 六句めの毎歌を和歌ノ姿に作る事
(十) 七八九十句ニ事更に表ニ顕ハす事
(十一) 古今誹諧四阿義句ニもあらず
(十二) 連歌賤語ニ陥ル事
(十三) 誹諧歌ハ名別ニ更ニ風体ニ非ず
(十四) 連歌法の事
(十五) 誹諧ハ式ノ法を用捨ス事
(十六) 連歌十体ノ事句ニ顕ハす事
(十七) 同体躰とハ云々
(十八) 宗祇法師ノ作を分ち出す事
(十九) 六義ハ誹諧ニ更ニ関ル事
(廿) 連誹篇序歌曲流ル事
(廿一) 親句疎句ノ事更ニ句ニ顕ハす事
(廿二) 名文ニ文ニ更ニ句ニ顕ハす事
(廿三) 古今ノ草ニ更ニ句ニ顕ハす事
(廿四) 皮肉骨ノ事更ニ句ニ顕ハす事
(廿五) 四道ノ事更ニ句ニ顕ハす事
(廿六) 同類名別更ニ句ニ顕ハす事

七 一斗の病ニ事
八 ソラゴトヲ白ス事
九 雨中吟ニ句ヲ白ス事
十 来集紀ニ哀句ヲ白ス事
十一 云ニ所ヲ云ヒ句ヲ白ス事
十二 隔句作リ句ヲ引ク事
十三 筒切ニ事ヲ句ヲ白ス事
十四 冠ヲ句ヲ白ス事
十五 棒ヲ句ヲ白ス事
十六 客ニテ句ヲ引ク事
十七 雛ノ初句ヲ引ク事
十八 四ツ手付句ヲ引ク事
十九 丸ル付句ヲ引ク事
二十 詞ノ多アヒヲ付合ノ句ヲ引ク事
二十一 思惟ヲ入ル句ヲ引ク事
二十二 ヲヲニ句ヲ引ク事
二十三 鳥他ヲ別ヲ句ヲ引ク事
二十四 五音ヲ續ノ句ヲ引ク事

㊷五 仮名いろはとする事 兼片仮名用給あるべき事
㊷六 はめ字のとんえのの事
㊷七 同意とする事 兼月毛の事
㊷八 女房ふうとする事 兼毛をえらべき事
㊷九 分際とうべきをいう事
㊸十 男と雖しもとする事
㊸一 出家老人の男にを要とべき事
㊸二 若年の事の要とべき事
㊸三 若若僧俗共ごとしべき事

㊸四 述懐のかこと兼かこと宿事
㊸五 恋のかこと兼かこと宿事 兼雑の恋の無名の恋
㊸六 まにと葉とする事 兼文字海とする度
㊸七 切字とする事 兼海とする
㊸八 連歌紙指十八切字とする事
㊸九 小ニ五ツのふとするいつまでも
㊹十 七ツのやふとする事 兼ふとする
㊹一 二ツのしとする事 兼二世の外
㊹二 不のめて事めとする事 兼二部とする

(三)〇字ある連ねる事但初と也て云ふ事
(四)ふりくみある事従来習切字よりふる事
(五)ふり仮名と訳と事柔通用のこともふる事
(六)ぞの字のある引事
(七)その字のある引く訳ふる事
(八)ぞ其字の処所にふる事
(九)よの字むふる事
(十)もの字のふる事
(十一)けれ字んふる事

(十二)数多切字十八ある中に主ふる事
(十三)下知切ふる事
(十四)事ふりて類ふる切字ふる事
(十五)大段り一切字の差別
(十六)三段切句を引表裏をあふる事
(十七)二字切三字切ある事
(十八)面よ切字ありて切ふ句ふる事
(十九)よと条切ふ事
(二十)〇字の数ふる事

(四十四)上の切字なくて外と每とそとよりそと上へよりそと外と每とそと云ふ事
(四十五)そと上へよりそと外と每とそと云ふ事
(四十六)發句外と每とそと切字なし
(四十七)疑つてをゝ一つけり外來うと云てをくと持つをくる
(四十八)うゝひ字重所をおくる但句として切字と取ると云ふ事
(四十九)うゝひ字重所をおくるもあしくぶるもとをくる
(五十)らんの重字のるもの
(五十一)重字のくてらんとそとらんと每と句なし
(五十二)一字くらひよりそと外のいらをくる事
(五十三)二字くらひ二所に所をくる事
(五十四)よ每よ五所をくる事
(五十五)めて每よ重字をくる事
(五十六)おとその字なくて每をくる事
(五十七)ぞとよりそと重てくれとそとよりそと外をくる事
(五十八)ぞとよりそと重てくれとそとよりそと外をくる事
(五十九)ぞうよの三字よりそと外をくる事
(六十)うも每とうくとうしてとよりそと外をくる事
(六十一)とよもとよもとよもとよりそと外をくる事

(一)
(二)
(三)
(四)
(五)

謙諸曉山集同録終

(一)

元女神詞とうけゐよ。こ陽ノ道たゞよそ
みゐてうるそ。て男神うそ
とぞ其根人王十六代景行天皇
甲斐ニ而わく宮ニ一揮(ヒキ)腐利(ツク)菟(ヘ)坂(サカ)彼(ノ)嶺(ミネ)ニ
加祢(カヨ)菟流(ツル)とろそでさんまし、央(ヒロ)と
虚(コヽ)ノ緯用(ヨヒニハ)時(トキ)菟(ヲカ)碼加(ヲカ)碼(ヲカ)と付(ツケ)る是連歌ノ
うりくゝ針(ハリ)そ(ヲ)ほくゝ
表(ヲモテ)と今天神の偈(ケ)とうゝ
かゐ水(ミヅ)とせうゐまそ(ヲ)

わさゐひとりあるへ(右ばゝ)
ひうゐのまそれどゐまゐ
ろふさうれ実ハ越(波)ゐんと付(ツケ)
とをうそれ下ノ句(ク)とをそ
面白ふ半句と云ふ事
歌(ウタ)そ入(イル)ふ古今ニ歌(ウタ)
うもみてぐ(ヲ)ゐ

拾遺集中 中ねふるうは(ハ)
抜(ヌキ)とゐかてゐ

流佸（リウレウ）のうつろを拾遺集抄ま（ママ）流佸（リウレウ）とうち付る事をうたがふ

詞書

流佸（リウレウ）

詞書

流佸（リウレウ）

詞書

天暦御製

良峯宗貞

遍昭俗名

云宮ゐる姿にてもつくりそうやみと代々を歌
よの表紙とてのひき物にも作り

わづ男めき老てなりよける武　とあるよ

むしろ玉のうてなみゝ娘まゐ男　敦貞卿

ん連歌に哥よまるゝ事ありそうやみと代々の
りうくる所ありて首のうちに哥二首ゝまとり
ある事ときゝ侍れば序とをのべて下の句ま
そこゝ趣とをゝ下首尾まで歌に長短の句無
まそこゝろ首尾とをのひて初あるべきとゝ

とむうゝ次句とゝ云事今のごとくに首尾ゝのりでゝる
ゝめでゝゆゝみゝうゝ侍云関ありでゝ乃時までもやうに
あるゝゝとゝきゝれば

娘とてゐ今ゝ心思ひいでゝや

是侍ゝる句なりとゝそゐ一句五でゝゝとゝ今ゝきゝみゐゝ

康正二年ゐそ里ゐ句ゐ歌　今川了俊

と付給ひゝるやうれ句ゐ事ゐゝゐゐ事
ありとゝそ大やう同答哥とゝりて五十句百句ゝ
侍る個連歌ゝとゝ実ゝる事ゐゐ明ゐの比御前衆

おぢも多く定家家隆などのみて作れれば式目乃定まるまで会席などに用ひ候事なく候へども式連歌乃ためにもうとからぬ事にて候へ

(二)誹諧と普通との連歌と異なる事

誹諧と云ふも連歌と申すも畢竟一つ事にて候へども式目などに於ては少しく異なる所もあり候へば式目と申すは誹諧と云ふ名を以て連歌と異なる所を書き顕したるものにて候へば誹諧と云ふ事を知らんと欲せば式目を見るにしかず候へ

これば奥義抄などに書ける誹諧歌の事を引きて云々

漢書之俳諧者滑稽(コッケイ)之別名也(ナリ)云々

滑稽(コッケイ)は酒器(シュキ)の名にて出でたる言葉(コトバ)にて史記滑稽(コッケイ)伝の考拠(コウキョ)云々

大史公(タイシコウ)曰(イハク)天道恢々(カイカイ)疎而不失(ソニシテフシツ)云々

多く常に次第に談言微中(ダンゲンビチュウ)に諷諫(フウカン)し優旃(ユウセン)の善為(ヨクスル)笑(ワライ)言(ゴン)にて会於大道(タイドウニアウ)涼(リョウ)雖滑稽(コッケイ)多端(タタン)部舎人(ブトネリ)教言陳辞(キョウゲンチンジ)雖不会(アハスト)大道(タイドウ)令人主和悦(ヒトノアルジヲシテワエツセシム)

是ヲ等滑稽ト大意ハ俳諧ノ字ヲ
ヨメル人偏ニ風言ト云ヘリ又俳通ノ若シ又俳諧ハ俳ニ通
ヒトヲ助ケ人ヲ通ジ一ニ事ヲ成通ノ若シ又俳諧ハ俳ニ通
シテ事ヲ速ニ妙義ヲ云ヒ奇ニ投リ是ヲ唯滑稽ニモ云ヒ
利口ノ事ヲモ云ヒ如ク如ク如言語ノ如キヲモ云ヒ或ハ狂云ヒ
テ妙義ヲ云ヒ又ハ人ヲ通ジ事ヲ成ス等ノ事ヲモ云ヒ
又云ヒ俳ハ善ニ非ス之ヲ用ユ俳ノ字ヲ云ヒ雖モ古今捨遺
ニ俳諧ニ俳諧ニ俳諧ニ俳諧四滑稽

五部俗六通ニ七空風八部俱九ニ是ハ上是ハ皆奥義抔ヒ
ハ抔ヒノ如ク俳諧奇ノ事ヲ云ヒ今ノ俳諧ニテ
ヒヲ抔ヒ抔ヒテ云ヒ抔ヒ抔ヒ云ヒ
ヒヲ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ
も不ヒ云ヒ通俗ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ捨遺集ヨ
ヒ抔ヒ入ル俳諧ニ入ル俳諧ニ入ル俳諧ニ入ル俳諧ニ入ル俳諧ニ
識ヒ云ヒ純信ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ
ヒヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ
抔ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ云ヒ

名付ることも人みなもちゐるものゆゑ
俳諧連歌とてより別にひとつのものゝやうにおもひ
と定めごとのやうにいひ伝へしまでいまの俳諧
也物ごとに変遷の旧式あるの証拠なり
の名称詞の要領をとりてこゝろひてこゝろづくし物とまで
あまりなるやうにいふ俗云を集めて一句とするは
をつづくる和連歌云ふ如くなれば彼此まぎれ
と称せるも俳諧等よりたゞもてまとめて俳諧
連歌とふたつのぬきを名付てよべるものゆゑ
彼此混(コンカウ)合(タガ)ふ
昇下一字付るなどいふ如く
俳諧則和連歌彼大義の大概よりて
付るものゝ如くおもふは両の俗
とも俗なるものゆゑ
もの文句ならでも俳諧
あるいは連歌漫廃の後世よりおこりしやうに
うちまぎれ連歌もおこるべき俳諧の句のこゝろ
紹鷗する義の俳諧
仙吟

千程の地も
この湯より白雲ぞ
又於二沼西寺一歌漫庭
そひ
杉木立
灯とも
おぐらの白昼おもひ
ゆくへ
伊勢

付句ハ多分ハ成ル
一句のむねより前句ニ
一ト其中ヲやどりくる通ひ志(こころ)ろ
ゆやの挑燈ともと大切
にとゞ弁ニ安うりといつ
むうれひも涙もなくて
よやとうくる意ニ餘情
する事とのまぐことのとう(ニツ)
らくハ詩人も哥人も
連歌ハ大やう実ニわる付合ニ
くてとのまぐ情と同
挑燈ハ今ハ
ハ
こゝにハ
ぞこれ
多別と
とゝハ
長ク

あるとこゝろぞこゝろんが萬葉集の中より二首をえらひて委曲をとうとうとうとうと
日くるるいさゝかもあらんまでとおもふ
雨ふれるいさゝかもあらんまでとおもふ
又雪歌
譬の居る池の汀の寒の内にうすらに氷はれる
又雪歌
○これやこのよもやよもやの雪の夜
いかばかりさえのこるらん雪の夜
親自ら詩の雪歌。氷のうへに波をたゝめるとこゝろ

いはゆる我の月ごろのむすき 良忠

ひれとそこゝろをこゝろぞおくりけるおもふよりもおくはおもひそ

今こゝろ筆をとりて云々

親自ハ有相(ウソウ)父相(フソウ)父字(フジ)近(キン)浅(セン)。練自ハ无相(ムソウ)空相(クウソウ)性空(シヤウクウ)深(ジン)。親自ハ教(キヤウ)言語(ゴンゴ)法門(ホフモン)音声(オンジヤウ)。練自ハ禅(ゼン)黙止(モクシ)性体(シヤウタイ)。親自ハ三義(サンギ)の教の不了義經(フリヨウギキヤウ)阿含(アゴン)の經(キヤウ)なり。練自ハ如実相中道(ニヨジツサウチユウダウ)の了義經(リヨウギキヤウ)なり。

(下)

うるおして教ふるごとく佛智見と義いこれよ翻して○観自在（クワンジザイ）と知るべし
自ハ第一義諦（ダイイチギタイ）无漏（ムロ）之心　无碍（ムゲ）之心　小乗之涅槃（ネハン）大乗之菩提（ボダイ）之悟（サトリ）也　有漏之煩悩　有為之識　生死之輪廻（リンネ）也　衆
生（シヤウ）ハ有（ウ）ツ
ても深（フカキ）よ入（イ）りて深（フカ）きそこ
の周（アマネ）く所要（ヨウ）と云（イ）ふ有（ウ）相（サウ）の奇遇（キグウ）ハ云（イ）ふまでも無（ナ）く時（トキ）ハ淡（アワ）き
の邂逅（カイコウ）ハ方（カタ）の指実（シジツ）とそ云（イ）ふ不（フ）思議（シギ）の那落（ナラク）尖
智（チ）ある我（ワレ）ハ是（コレ）ハ絶（タエ）ず流（ナガ）れ通（カヨ）ふ事（コト）と云（イ）ふ一大
事（ジ）ノ因縁（インエン）ハ小衆（ショウシュ）ともあるまじ有（ウ）相（サウ）の

法（ホフ）と祝（ホウ）の人と化（ケ）女（ジョ）とそ云（イ）ふ二千歳（ニセンサイ）の人の服（フク）とぬくもり
科（トガ）と統（スベ）まること其（ソノ）通（トホ）ハ有（ア）ものも云（イ）ふまじ親自（シンジ）ともと
もとご海（ウミ）ぐ佛（ホトケ）のおむ（オン）ごとくあるべくとそ信（シン）ぐべし
也（ナリ）歌（ウタ）とをそうなやうに実（ジツ）の人もあるべくあれど仍（ヨツ）てある
ど雖（イエド）姿（スガタ）とあるうえ也（ナリ）舵（カジ）猶（ナホ）ハ教（オシ）ふ化（ケ）女（ジョ）の如（ゴト）きものあり（アリ）と雖（イエド）
霊（ウツ）するやうなをなうそれら皆（ミナ）通（トホ）よりて云（イ）ふ不（フ）思議（シギ）乃
人のそこそこあるべく今（イマ）ハ舵（カジ）猶（ナホ）ハ取（トリ）りて也（ナリ）歌（ウタ）の法式（ホフシキ）とも
てそ侍（ハベ）りまし牡丹（ボタン）ちよ喩（タトエ）て
いふべく連歌（レンガ）ハ舵（カジ）猶（ナホ）ハ狂（クルヒ）云（イ）ふ其（ソノ）筋（スジ）を史（フミ）憑（タノ）ありべむ

所之又犯言除憍(キヤウ)慢(マン)等之(ノ)二(ニ)戒(カイ)捨(ステ)ハ行(ヲコナ)るまで犯(ヲカ)そと
云(イ)歟(カ)捨(ステ)ハ行(ヲコナ)るまで犯(ヲカ)そと云(イ)歟(カ)
いとも也て用(モチ)ひまでもやと云(イ)歟(カ)
ゆへ也(ナリ)て今(イマ)うく名(ナ)乃二(ニ)つ名(ナ)目(メ)歟(カ)
守(マモ)り捨(ステ)捨(ステ)乃(ノ)字(ジ)とつゝしむ
いづまの方(カタ)も外(ゲ)藏(ザウ)内(ナイ)淨(ジヤウ)外(ゲ)淨(ジヤウ)内(ナイ)穢(エ)と云(イ)事(コト)
一(ヒト)つ合(アハ)せ教(ケウ)意(イ)和(ワ)歟(カ)捨(ステ)ハ実(ジツ)道(ダウ)よ執(トラ)ハ
して行(ヲコナ)うこと乃(ノ)字(ジ)とよりて
(三)或(アル)人(ヒト)問(トヒ)曰(イハク)まて乃(ノ)字(ジ)

也歌ハ多クハ題(モノ)ニ依テ其時節ト縁(ヨリ)ノ遠近(ヘ)ヨリ
ヨムベキモノニシテ或ハ彼時節ト
不遠ニシテ自ラ出ヅル事モアリ
又ハ必(スベ)カラク思ヒ出ヅベキ物ナルニ
カヘリテ忘ルヽ事アリ又ハ
ヨカラヌ事ニテ思ヒ出ヅベキ物ニアラネドモ
イカニモスゴ〳〵ト詠ジ出ヅル事アリ
江湖ニ遊ビ未ダ花落葉風
ヲ見ズシテ帝都ニ入リ風景ノ
異ナルヲ知ラザルガ如シ
又ハ或ハ秋ヲ悲シミ或ハ春ヲ
惜ムナドノ如キハ皆ナ
ソノ時節ニ遠ザカリテ
ノチニ思ヒ出ヅル者ナリ

自ラ知ラルヽ事アレバ教ユルヲ
マツニ一字ヲモ知ラザル事アリ
事ニ慣レヌヤウナレドモ
ト考ルニ長ラク幽籍ニ在テ
ナル五七五ノ句上中下(カミシモ)ヲ置(キカヘ)
味ヒテヨト教ユルモノナリ
ヾ〳〵ヲ作リ出シ人ヲ雖(ナガ)
ヨムモ外間切冠(カブ)ナド
作リカヽル婦(テ)ニ云ヒ事ヲ

古事記傳卷第廿一終

古詩經云云此時よりこれてのことなりしなり云云

神祇を歌

同　雜猪　△たうとさを詞書

大神宮注樂之

ちはやぶる神路の山や杉の葉の　宗祇

いや榮えにも仕へまつらむ

釈教 主歌　みくら川 [illegible]
同　舩猪　△山吹の色よりも [illegible] 初舟
哀傷 主歌　五月やみおもこりもやらず 式部
同　舩猪　△方よりもうれもやあめの 影常
述懐 主歌　世よりふる [illegible]
同　舩猪　△よもすがら [illegible] 宗祇
懐舊 主歌　古郷人 [illegible] 宗碩
同　舩猪　△ひさしく [illegible] 常縁
旅 主歌　若くさのつま [illegible] 宗碩
同　舩猪　△ささわらびの [illegible] 友雲
新祝 主歌　[illegible] 昌叱
同　舩猪　雨よりへりて [illegible]
名所 主歌　橋もなく [illegible]
同　舩猪　玉水やそのもと [illegible] 宗碩
錢別 主歌　雪ふる [illegible] 宗碩
同　舩猪　朝もよし [illegible] 信徳
造宮 主歌　三そうや [illegible] 紹巴
同　舩猪　△三そうぐ [illegible]

繪賛歌　　芦屋ノ繪
同　　船猪　　△わたの原八十島かけて漕出ぬと人には告よ海人の釣舟　　白堤
　　寒山拾得の繪よ
賀歌　　△まくの葉八百万代ふるとても千とよ松ぞ　　通弘
　　義保公精九十賀歌のよし
同　　船猪　　△よろづ代をかけてぞ祈る君が為百とせまでの命ならねど　　宵柏
　　伏見
雨乞歌　　△ちはやぶる神も哀と思ふらん雨やは降ぬ雲の絶間を　　心琴
同　　船猪　　次の日雨ふりしよし
　　△雲間より千代の影をぞ待つるに雨やは降ぬ雲の絶間を　　昌堤
寝覚歌　　夢と見し昔もはるの柳かな　　紀昌
同　　船猪　　△偽(タノ)めぬ夢をまことの名残りかな水柏　　順水
古事歌　　月ハ今朝とやいふらん　　智蔭

同　　船猪　　巫山非女と
　　△寒き夜うち寝て夢と抱(タノ)むる　　佛水
　　輕羅ノ小扇撲流螢ノ
古詩歌　　△うすものの白きあまりに　　宗祇
　　ノ班婕妤團扇ノ扇と作ル團ニ
同　　船猪　　△うすものの風情日よ琉團扇　　芙角

戀歌　　ちらぬまの妹よいの神紅葉　　宵柏
同　　船猪　　△筆のさや焼(クキ)て給ひし牧き尺　　多樹
　　尾
追善歌　　月もてひむかひてこせよろし　　昌休
同　　俳猪　　△くやしくもいのちのこれやうらみそ　　丈州
お祝歌　　△つるやかめ千とせのかずを　　宗祇
同　　船猪　　△夜草や竹のふし多(ノ)ふるまで　　敷(ハ)
　　尾

古哥　明日もこん方のむへこそ宿哉
同　雉猪　△生ル雲いうまでもなし行のこゝへ其角
　　宝永四丁亥の歳の冬紙衣を
　　乞ふて人の許へ遣すとて
　　芭蕉翁
又紙衣　ぬくからんとたのもしや
同　熊猪　△名月やひとりもの喰ふくやむ　宗柏
死鳥　　但二月松露ま
一つ喰ふ鳥うらやまるゝ身の自由　宗柏
鳥う一方とたゝうれて行ふくやむ
と作るも明ぬれば行ふくやむ　曰山梁非新附
武昌之魚不復思洞庭之鱠　李白
　　此二句の意を以て
　　死鳥の句とせり

う鳥とひとしく時の新と新
同　雉猪　うれしやの声まで忘れず　芭山
生ル雲月の死鳥とうれしやの声まで忘れず
よ限るべし　彼六条行ごの地とて行ごの声と云て鄙
と限るべし　但此度は集の中へ入ル事もてご
うと新ある句ねと加へる句ねとうまうまと
其ごうと新ありきたなしとて
べしとの事　歌猪

うるさゝと暑ゝ堪て勢ひ
㊁武人向脇こゝ
脇ハ数句のむとうくうりく
すべ〳〵句めうとはりやう
ぬのてぐそとるこそもの
よろこび俤数句よ最初
むすびもやうとまりてう
の数句なうべ〳〵裏きうと次やう
ご類水辺などうをく付

ものうるべきやうこゝに今一味ひてとゝべく今
時雑箱の服とそれが蔦のあ(ヘビ)蝶の羽(ハッカ)をつゞ(ヘツ)るの断(タチ)
ぐる類あげてうぞゝべくゝのごくようこと
くいふまでもうこゝ云物よりからずして孰則よりまた多くの
服とゝ多くとゝ作者とそいとゝ悩ゝるゆゑれば服よの得
からゝべきゆゑ一神祇教表場懐舊祈祷ゝ示
のまたあるべく其ゝとよく味ひくゝりあるまゝよ
ぬやうまもゝべく述懐の義句他(ホカ)のものゝべくのこと
まゝもゝてゝるゝとを意とするゝ是則(コレワナリ)のんと

あゞるまゝ同一物遠付とゝ物よくゝり一個独立の時ハ
服を述懐のなすまゝべく又挨拶(アイサツ)義句よハゝ挨拶
ようりあゝぞゞるを則服のなすまゝの挨拶ともゝるゝ条ハ猶う
やむよ約ゝまよ今朝のそ客世云ひ服よりおりへ全
ゝゝとゝ一ゝ世宗もゝ是ハ宗長ゝ海の時三条実あゝそ
ゝゝとゝれ義句ハむよ約ゝまよたゝて宗長と猶う
ゝとおゝれるゝと服ゝ羊の言ゝ猶ふようりあるたる
なるべゝ是ゝおのんとゝくゝべゝひゝるべゝみおまゝ
述ゝの義句ゝ服のうけやう大まゝ条ハむゝこゝり綿と云

羽紫とうちふるふ名のあるとそうでもおもすでのとうとくべしとも絵に桐の葉ある出ん鳥や鳳のあるを家紙は養白鳳と風凰とたとくるも亀甲に風凰の相乃紋を打出ん鳥に風凰は聖人の代出る瑞鳥也梧桐よりうごれどもすべされ脇とするゆえ風凰のみとえらびおうと家紙に易ドいまそれば家紙云ける白い鳳と云て仕立てる白それば風凰のみと鳳ばかりてもよいがもうさあとそうる婦風乃紋を付給ふとうされけるとそ云ふ名のある養白とうとうとうまでさうひ桐を画を画て養白ふたつ鳳凰の相よさうまたうべしとも神楽(カグラ)に若衆(ワカシュ)の服やうのもの見合とべし羽引(ハビキ)ある鳥ゆえ羽引ともつづくる名ゝ類抱(ダキ)ごとにみとべしるも皆ゝ破玉乃小柳(コヤナギ)の紋とうとうねよひとうきかゝる名ゝ

○脇に五つ紋仕立三つ紋ハ打掛付二つ紋ハ打掛付一つ紋ハ遠行につゝ紋ハ公家五つ紋ハ武家の紋とうとうとうとうとうとう

桐対付とハ雪の袷白き
綿と付れ色おいともよ対も
き歌袷白　名ハ都ともゝ
同服　卯の花や雪や卯の花
雑指袷白　鯉のぼる仙酔も
同腸　高ハうもゝそひともる松ノ枝
是おとゝ云つまもや対もゝる和歌
手添付とハ袷白よ面白さ
風情と味ひうらへ随ひ

き歌袷白　雪まぶしうふり
同服　切火をく梅ありノ里
雑指袷白　宮人もうむさまう袷のむ
同腸　袷しめうめ屋三月春鳥

家紙
宵柏
秋立

眼よ蓬萊をやしなひもちゐる人へ
也歌參句　別やこと〳〵赤とも和の玄露　宗祇
同脇　まこと實此心の苑乃つゆ〳〵　玄仍民
古今集紙鏡もめでゝ海山と老をあれいづくのそこそこ
おくれと懷（すもに）とのべらまて〳〵も速懷乃ついとゝもして苑古
乃つゆ〳〵まこと實此付句也
誹諧發句　初雪の樂ひいうは西王天　伏三　雪峯
同脇　雪乃奥ハ東帛（タイ）乃公　伏七　拾弟
あぐも互よ遠付とゝべすやしおとぐ云亀くうつゝべし

ひ付とおもの蓬萊（ほうらい）ひとくうけて行とゝりて付ゝ
とゝよおうゝびちゐざ〳〵とこ雨やうとゝもとゝ但亀と
そゝぐゐろ〳〵ようゝべし
連歌發句　春乃初ゝゆ小苔ゐむす〳〵乃栗　親南
同脇　芝生（しば）ぐ〳〵これも梅乃匹水　同人
誹諧　もりよ之多橋ゝ扨〳〵山桜（ゆう仮）　同人
同脇　紫雲えわ玄雨農石
あぐと類とゝいさゝりやう
汁発とゝもふ遠ゝ今日のゝ人もとぐぞん

しるすべしうるさきよりおやうえて見よ秘事口傳
也歌發句　附句うて笑やう枯野の梢かも
同脇　雪ちらくいろへかさねとうる氏
俳諧よ　同發よゆよ新そづゝや炭俵　京定之
同脇　嫁の袷と二ツ寺多よろ　江戸亦志

もむろ類とすべきにうんぬんもも記をせめりて此八脇八
平句ともうして其ま發句よりうつしものするからべ

六　或人問第二乃条ノ

答ハ随分長るく幽玄なる秘とをもり平句ある
句と也センともべし俱發句脇よ意趣をむとびあれば
第三ありていふとテンすべし脇くうんくうもも
そひうくとなめとよりとを取て發句にも異り
よ随ひていろくのひもりるあり心脇よをむよ随ひ
第三よとりて二ツその發句と同月よめやうかて
發句と同月よめやうかて二ツ命をふんある等八發句よそそて
そうべし発句ともべし第二乃条ノ

腸　　かくそくは朋友の志
第三　　同白ふりてうひく梅笑く　　同
右發句いうる所の函丈と師とそれをおそれ
仕立てもの第三八もとでくすこびくすると俺ども
發句腸第三までで年玉のせてよこす舩　　如琴
同逃猪發句　雅が聲ぞいい分を城下とまりの春の始
腸　　酒のさまあい梅よろこれ事　　素堂
第三　　て敷皃として角し片田舎ニハ而之字ハ　　如泉

あくすおどくそやうをひらかれがくはもちゐる
發句　　五ともくくれ家さそふる雪の私　　陳順
腸　　ハーをひらめる月のこ窓　　宣政
第三　　もうらのくれ枝の居よ寝えて　　昌原
逃猪發句　おとともれど最よそめて宮馬　　言水
腸　　町ハ戸ときともてまもへ相　　和及
第三　　万歳ぐふハ酔うるのて　　我正
でと酒ハと不案とする人なあれ皃まるも約る皃必
名別のるまりひでて角くおくでやらでそのの額を

うらごてたえやらぬ
發句　うら山せとや鶯の鳴ならし　作者不知
脇　　かすむる窓よりありあけの月　同
第三　五月雨ふれて雫の絶やすで　同
俳諧發句　みちのくやまでも流る雨の水　大坂　倉橋
脇　　夕の月よ咲でまち稲　同
第三　下座浦風拾ふ出れまくへで　同
あて發句なくて發句の中おもうりあるこそ發句の式句
のけしき合をもとべきものなれ

らをそれはあてよひらをもとめ
ばことのみ吟味するこそ今はからまおぬさき
發句　うきこもの風とも
脇　　雲やわもと秋の夏の雲
第三　人やもと雨郭の山ぶき茶にて　昌好
此發句おもおもよ通ふ　乳めなの面影　昌悟
いそ〳〵ば不吟發句こ第三ハ
のなぶごさるよからんび　人やもと雨郭の山ぶき茶にて　昌純
俳諧發句　壱よ香よもと鳥和尚にて興行　寛也

脇

いまぞ追手の鐘しづか白梅　同

第三

時ならぬや小袖かさね〇ぬ旅せまそ　同

此第三にて心しも第三名ありしハ体字之留て之候白は暑之発句之花を被成て心になほ其心の花鏡にもあらぬ含る也第三にくさくびらんと留る也第一ヲにして疑字を出すゞ之但一字も〇かならずしも留らんと續くハ二字にも読むる之但第三にハ一字にも〇其事にてもいづれとしく之ハ切字乃所にあらんとしても一字をも〇にあるも有る之乃へもやかもし

発句

徒中こそ人ゑりくとせよ知に決　紹巴

脇

いづ秋の里も同じうち花　宗因

第三

夏夜なりしとや雨のきれぬらん　玄的

俳諧発句

池なりたる川むくるの蛍撫只　秋風

脇

雲こぼるしく菓とりを蔦　同

第三

疑ふ胡の梅糸や紬くらん　同

かくと似るべき事にて但見ねハ事をはるもすぐにもかへれ

よろ色いろなる會まで有りらん

脇

あけうくひすよ宗なる竃　畳作

第三　打つかる気の毒さ　宗長
俳諧発句　うつゝなや夢とこそいへ年男　猪苗
脇　吸ざさうそうぐもんさぐん　越人
第三　今日のむも脇をうるとは　同人
如斯にて発句と同じく上の疑字下知の知をこと
更にうつゝ次第にくゝよと堺のわかれより
こゝろ〳〵八重歌かも俳諧ともに多くはあるものと
脇　そてにおく梶のちりそうな兵　暑仙若
第三　これひもぞ茅ぶき迄　祖白

俳諧発句　七宝や月こゝろにひとつ付て見れば　孫之
脇　年ごもり八重の華作る雪　琴之
第三　松桜中みどりつゞく校書　角猿
こゝろ〳〵八額ぬかに八百下の句よりつゝ名二ツ兵八三字
みうてまき歌八面とこゝろ俳諧よ七句ものこと

㊐四句めの事

○古今句脇第三までハ詩のごとく起承転結と続き来れ
ども今句八共附よ随ふ例也故に第三ハ其句よりも前句
第三仍而句こゝろ句ぬ次第よりうつりめ句ぬ

第三 女房の心すごく一首云々
これ則ち（コレスナハチ）猫（ネコ）を抱（イダ）く恋（コヒ）と結（ツヅ）くる
いづれの今（イマ）の世（ヨ）にか彼（カ）の俊成（シュンゼイ）卿女（キヤウノムスメ）彼（カ）の一首（イツシュ）
をおもふにすべて第三の句（ク）彼（カ）の一首（イツシュ）
にいはやうもなくとりあはせたるものなり
その上（ウヘ）下（シモ）句（ク）の人（ヒト）云（イヒ）句（ク）
くるよもあかつきもしらぬ山ざとに
案内（アンナイ）なる事（コト）ぞりしいうまでもなく
白（シロ）めれもとりあはせなき名（ナ）

文字（モジ）あまりもとるさまざまの其次（ソノツギ）でをうろくとせよとのみ
古人（コジン）の云（イヘ）る白（シロ）めれ老（オイ）髪（ガミ）などまぎらかし
白（シロ）もの、もちゐまじきなり

第三
篤（アツ）き同（オナ）じ心（ココロ）の友（トモ）ありて
文（フミ）などやりて
雁（カリ）信（ガヘ）第三 まことありともしらせて
同（オナ）白（シロ）め

第三
らん後（ノチ）白（シロ）め

文字あまりもとるさまざまの其次でをうろくとせよとのみ
古人の云白めれ老髪などまぎらかし
白もの、もちゐまじきなり

第三
篤き同じ心の友ありて
文などやりて
雁信第三 まことありともしらせて
同白め

第三
らん後白め

署作者
紹巴
作者署
三圃
略作者
昌叱

雛猪第三　小性序（ヒロウド）天鵞絨も枝のもゝ老もの　暑仕去
同四句め　おそばこゞうとれんこんひとそん　伝流
第三　笑ひ番をそゞれまでむ抱ちて　暑仕業
詮義共に句め　まち兀ぞ兎のちゝ秋やうめは　紹巴
雛猪第三　栗のも暑いうきいの文もの　暑仕去
同じ句め　ひはそろくまで雲葛一カ汁　雲燈
第三　まゝの水もの（ユク）手（テ）まめ弱とひさぜ　暑仕去
この句め　沢山よもろ兀四ぜいとうり　昌叱
雛猪第三　新酒と仕るう里よ去義こえて　暑仕去

同じ句め　腸（はらわた）とされつゝ坂のうりるより　松運
ありとくまれゞうめぞ沢山句めとくうりと有るは限ること
うれいたくび百句ようくうべーもくれぜと等（ヒラ）へ
ありていうやうのうもなるまでふまでまち
ていそひとゝものまたゝびまうまでまで宝れ
る羽とてもあるぞ兵服のもれをぞよいもやう
よ随分ろくまでこゝろ但腸のもいぶき
もうるずとぞをむと（オモ）そくりれあるまゝ

（八）五句めのとゝのう

まくらめいだい第三ノ体ともうしてもろもろくからくべ
ものりハこれらをもってものうたのこころをもとめ
但第三のことわりと見合てさうよなうたぬ事うまずべ
しもと宮めまさごくうのごとくれものうたのこころ
ものもハなしめとこうのよハひめくのごとくの事う
あてハなとそうく幽玄よりのものなれ思て神わざ長ノ句ハ
大ノ句ハ第二ノ句第三ノ句ハ長ノ句五句めより随句一句ノ位ノ
長さんじゃうずるものうたて長ノ句第三ノ句ハ
もとうくしくはもうせゆうべ其五句めハやとそうろう
一ノ事ニ重なるものくむこと有りもいうやうにさりてもの
くさまめうたこれらにもとる
第三
四句め
五句めうたの名
村や竹の煙ほこととととん
飛階第三
同じ句め
五句め
大川の端ノ柳ハひこりて
須拾ノ上ノ
ものうたの名
月ハ東や野ノ人ノ来ぬさき
ものうたの名
尹奥

第三
四句め
五句まで
俳諧第三
同四句め
同五句め
但四句めより
第三
四句め

心寒とひとりごつ夜の月おもしろく
吹てくるる秋風もやや
まくの葉ずれ
百姓の庭
隣より酢を猶乞れあと
撲寒と撲ちし
五句めより
一騎うたれ
秋ふかきかな
昌化
春澄
昌化
春雪
昌化

五句めより
俳諧第三
同四句め
同五句め
第三
四句め
五句めて
俳諧第三
同四句め

清のおくりし人形もちて取よ
物菓籠すゝめ
風よびこむ
仮織の
こぼれや
庭よりそこの
氷と池のそこ
御かへり
屋風ひとり

昌化
春澄
改定
昌化
春雪
昌化

同五匁め　仮名筆墨(カナヒツボク)　永常拙

右八白壱とどろ〳〵ととろく煮(ニ)
○六匁め客人(キャクジン)脇(ワキ)へ打(ウチ)流(ナガ)し
つゞくとゐうまで
流(ナガ)しよき程(ホド)煎(イリ)と流(ナガ)すこと
まてそとゐひねりなる事(コト)
れるもの□□(なり)□(ハ)□(角)□(う)
とろ〳〵んがとしてゐるまでも
それよき程(ホド)にもやうよろ
しきとき

流(ナガ)し時(トキ)程(ホド)をよくみすれば風味(フウミ)
宜(よろ)し八白宝(たから)ろ
まき歌(うた)雑俳(ざつはい)八白五十白
指(さし)ことゐうまでと作(つく)
とろりて輪廻(りんね)とゐれねばど
ひとろ〳〵とろやうにとろ
ろ〳〵と作(つく)りよろしく
○七匁め五白ろとろ〳〵

八百万古人四百万よろづ
とうぬと八百万ぢうとうた
よあまつちよ五百万ひろ
とうみもつ〳〵ど乃今て
。九百万十百万までをやて
どうた裏〳〵うて二百万も
うう氏給ふ我が前百万よ
百八ふを川うまとうべ〳〵
古山十百ゆて八神祇教主云常通懐う舊う衣傷

名伝ふ八間裏の伊佐司今
世ゆまりめり世乃宝ゆどう
濱茅乃我〳〵ふぐの初
まう歌ゆうくのごく古ま
今阿雛猪ゆ裏へうもや
初ごもと出すうろ〳〵
乃るゆ彼法交れ初と出
人浜名国よ恥ゆとべう
板神な我八初れ面よ

五畳むえかうそるすこいづまこの仏祢も男女ろうそ
とのつべらやえ信吉五は信い和尊の祢い通よらとこ
ろ人とろそこれもりつべきろ八情ろ吉夫神武家より男
ひおい吉智い尊今祢人とこうそこともそべるもや
泊りべーてりつべ尊やそこの佛祢の尭遍廣大ある事
経事まい家ろんぞや祢祢ゑればそきーつべき表よへら
んやりと初われ面よ祢紙釈教五学と尊懐吉事ありと
こーひまれるい面とやそこいやまうんとそるすこ白仏
りやそこなるとそ面ていぐ吉ろ

よそこくと仏るへ
りわいうてい
うそべ名詰(ナコリ)よいうくりうす
しりべおまし彼(カレル)当(ハッキウ)尾扉祇尾
但し祇祢れて吉人り云垂る
自尚自答までりるしひ
そるるやり時り宗通よ随り
尾ひりる初こ祇しなもそ
しれ外百白れ年又系祇まよいろ

炮ろうそく出来る
業平孔雀曼陀羅
に赤ぐろ白粉の縄よれ暑ル
る鼻（イビキ）こともちこさ唐の薬
凝（こり）しまり凝（こり）もくろ水車
もよふ柿いそのうまそうしもう雨祭
よきこねかみそうりのやしやもよう乾
ひりうや活版ろくそ出の祭
下戸どもごこうこさで天狗筆
初汉い活字印刷ろ浦の出云

かるた　一笑
伏陽ろ唐　牡丹
伏陽　め帆
日同
京上　活版
乙湾　京鑑
ひ戸　真南
大坂　尚白
京　鶴名
丹波ろ引札

炮烙の碁石ル
乾ろうふむ肥の鉄ようけぐろ
桐そうれ侍町一尺屋　尾谷
つまてゆるこ家とも煤ぬの所
猿のみようぐ把入ル耳ぬ宿
暗ひくや天の川原也　法遠
賣家の雨戸明ま穂菱
秋ぞル着火賣の鍋火のこうい
逆竹ル窓ようひこむぬこル
銅件守記ろよ舟るろ火打

丹波ろ　吟笑
大坂　高七
大坂高名　休計
郡山　雷五
大坂　合筆
京　宋下
高九名　休計
大坂　合筆
大坂　七歩
京ろ　友元

春うれやうこのうちとそうの事
永島や水を加ふる風炉の雪
魂祭り狩人けふひもせろろ
うの妙乃吏掃張せんみまろろ
石出て飛ぶ付しの雨 小
夕日とり襟ぴくうふや雪九時
船と切る事時くれ乃雨小
宝くくこう月みる
楫くて笑やかの奥乃佐
うき捕や海のうへるる書こと

素六 友元
伝弥兵衛 哉乱
伏陽 め帆
伏陽 十人
来め泉
夕湖玄
来 雑風
夕ア 素堂
誠哉 宗月
冊後乃 修
列ル

うやけこそたゝ乃ふ
仮指やくりてよこと世れ加走
体あくいこうれ鰻乃
初付西映乃
色いろ蚯断きあと哉事小
もりこうや焼野とうてとれ事
綿よりけへ小こ友乃を小
ある年の頭よこう
まる雨やまれんへうし
人の乳ゆるねてこと掃小

冊後乃 吟笑
哉役 国月
伏陽 知扇
打咽 西吟
来 西哉
来 宝業
伏先
来 一吉
素 友元
冊後乃 修
列ル

元日八大晦日ものそ
なれ尽て海のよりうち
日と冷ひるよりあ
尼寺や淡さ梅まろ
ちるもよ仏や出んと
梅よれ〳〵ふり非み
残りい残〳〵れ〳〵
みそのむ風の机り
埋も井や券れ隠
衣更やえ〳〵よ

冊数ろ吟笑
大坂住原
伊丹ま雪
冊数ろ此笑
大坂万寮
郡ム雷子
冊数ろ吟笑
伏陽蕉京
郡ム雷子
伏陽百白

もちりやおりいと
七草ゐ笑ひそやわらも
伊勢まう郡もう〳〵
栄の戸ゐ勤少メむ
元日や珍こと〳〵
おりの出ゐおう
一延ちるや日ら〳〵
出ろりや明ル備ル備昼
包解るまでちの秩

支用下
書夏元
永言水
永幸佳
戸素鬼
大坂戈麿
永去来
書友元

十人

のうるとまもうこと

(十二)賦人同賦物之事

○古へ賦物ヲ題或百句或八五十句或用賦物二説或ハ各別ニ
近代多句ニテ賦物ヲ脇句ニ下ニ而ハ取ル
聊不忘(ワスレ)舊儀(キウギ)而已ト 是又賦勝の類ト

是ハ舊式連歌ノ時ハ賦物ト題ヲ
也又今ハ十句ノ内ニ今新式ようニ
同事ヲ不許ことくニ
拾ふものとそ

○賦ハ(くるのん)(ゆるのん)(ゆるのん)(くるのん)(ゆるのん)(ゆるのん)
或ハ十句よりうつる句句ようニ
ふものくてこを賦物ととる舊式ニ
うつされて賦物ハ句句ニ
云不拾ニ賦ノ字ありてハ
○賦物の字上ニ百句ニ中ニ表ハ句半ニ
近代ニ至ニ而ハ調ニ
字斟酌スルトいへども今ハ第三まで
とみてうつゆまでの也

叔父と書何ぞ近賤也と云ふに
云ふとそ
ちりめんと云

雖也篇

必行　何路　何求　何人　何舩　以上五箇くは白
朝何　夕何　何如　何也　何居　何事　何以
爲何　下何　孰何　何許　何所　何田　何草　何多
何用　何水　何至　何所　何由　何草　何多
何　何文　何女　何人　何如

雖也篇　舊本數多ノ脱字ヲ出テ不宜苟畧之
何世　千何　五何　以上新添
○又二字専訓三字中畧　四字已下
器ホシ　但一字露訓雖也ハ近代ノ百也歌ヨ取
惠用ヲモ其外二字通音以下雖也千何也歌ヨ取之
○一字専訓云ハ日ト火　数ト香　名ト業　くのごとく
○二字通音ト云ハ　竜（十）ト縄（十）　夏（ナツ）ト熱（ツヒ）　水（ミツ）ト飛（ツヒ）　くのごとく
讀二字名ト成ル并字ノ類ヒ
○三字中畧ト云ハ　蚊帳（カヤ）ト紙（カミ）　雨槌（アメカツラ）ト唐（カラ）

右ハ三字訓之字略中一字名ト成二字仮字之
○四字上下略と云ハ　鶯櫪（ウクヒスカヰ）　玉章（タマツサ）と　松　苗代（ナハシロ）と　橋
右ハ是字訓之字略上下二字名ト成二字仮字之
△但　貝ハ平聲之　火ハ去聲之　蝶と霞ハ上聲同之　蒼ハ平
聲之　菜ハ去聲之　右ハ是らんども丶を吟味有べし　迄
右中略上下略ハ是字聲之字也ハ去元よりもる
しら浪中ニよ不審有るハ　上下略と同よ
鶯ハうぐひすと　又是を　櫪と云事くわし　邪とあの
遠ハ何事と云を不苦ものや　此沢又台所賦物乃元也

不残ある物べし家れど数多あまりされバ略之
一偶とあげ候間句をとりつゝ
行路　宗不こそへもし咲ぬ雪て小塩山　白　山路之
行人　絹ころ花や知りあへぬ顔を書　旅中　むし人之
山行　玉篭おろさでむものおくしれ　英猪　山嵐之
初行　来がしと声もよしむる枝よれ　思化　初花之
一字露訛　暁べといふ雅への柳の木蘿嫁代　子も　蘿腫之
二字迄音　寄まで花のさかり盛界　家の　杉縄之
是ホハ大原千句桜御所千句年々の中ゟ新撰

此外三字中畧ス字ヨリ下畧ス白ヨリ安準テ迄
又發句ノ中ノ二字續ノ字ヨリ下畧ス事ハ郭公テ
句ノ中ヨリ上ヲ略ス事ハ山伏ヨリ丸ニ卯木ヨリ
山伏ヨリ丸ニ附句ヨリ夕伏ヨリ丸
類ハ皆ナ此ニ準ベシ
又發句ノ中ノ一字ヨリ下ヲ略ス或ハ
一字ヨリ下ノ字ヲ略シ或ハ一字ヨリ下ノ字ヲ略シ
又賦物ヨリ字ヲ略ス或ハ柳頭ヨリ發句ヲ
略ス時ハ賦物ノ何ヲ記ス

まどゝもろこし是ヲ類句ト云
又賦物ノ略ヤ其ノ字ヲ略ス時ハ
まどゝ云ヲ或ハ句ヨリ下ヲ略ス
又ハ賦物ノ句ヨリ中ヲ略ス時ハ句
ヲ略ス句ヨリ下ヲ略ス時ハ句ヨリ中ヲ略ス時ハ
句ヨリ下ヲ略ス又賦物ノ句ノ中ヨリ
細ヲ略ス時ハ細ノ字ヲ略ス句ノ中ヨリ杭
ヲ略ス時ハ杭ノ字ヲ略ス車ヲ
篇式ノ通ニ改ヨ表ヲ句ヨリ賦物

まタテくのごとくさうざうしそても追付さるゝなり　但上賤下賤ハ今
ごとくさるゝなり上賤句ハ八十句とも同じく下賤句ハ
八十句ともに同じきにすべし　又俳諧ハ舊式を学び
候さん時も第三の法控を守る人もありし
此外古事　指法　詩　文法なども発句に綴（ツヅリ）て付賤物
元やう古き事ハ是非ともおもし　候ん
古来之捉発句無元賤物二ツよりさらとハ不取之なし人ハ
山桜とさる発句あり　人乃字不可取之　桜人とも山人
ことりまさる故之準他ハ之又三ツ目まて賤物と同前

但又舊式乃まゝ歌ならバ表十句目まで発句之外付句ハ
くるしからぬなりとも也　俳諧もまた同じ

(十二) 俳諧賤物之事

○貞徳流俳諧ハ賤物ととらずといへども此事ハ我等是非
なしとおもふす其所謂をつさまんとぞしらぬ者ハ咲ぬらぬ
とばかりハなくてしもさるゝと云ハこのみぞと同じ二番
まことなれバ連歌の本にしかじとくて賤のうくるハなれハ舊式
のごとく五十句百句にふくるの面々ハ賤の字よりあたる人々是
句ぞうちとには元てハ不給あし也歌よ元いふ舊式を不足

忌こゝろ義こゝろ俳諧ゟ旧而式ゟ連歌ゟ新式ゟ
借りこゝろ事なり扨ハ旧而式ゟ
及こゝろ事こゝろ二つゟハこゝろ名ゟ
ゟ何ゟこゝろ賤ゟこゝろ乱ゟ発想懐旧
連歌ゟハ賤ゟこゝろこゝろ貳ゟ発想懐旧連歌
義ハ前ゟ連歌ゟ所なゟこゝろ
事ゟこゝろ事こゝろ涙(タイ)のむこゝろ
ゟこゝろて涙(ダイ)ゟこゝろゟ俳諧
涙(ダイ)こゝろ俳諧こゝろ連歌こゝろ事こゝろ

同こゝろ準するゟれハ賤ゟこゝろ
ゟ三南ゟこゝろゟこゝろ俳諧ゟ賤ゟ
ゟこゝろゟこゝろゟこゝろゟこゝろ
とゟりてゟこゝろハ別こゝろ
諧こゝろ二字ゟ外ゟこゝろゟ俳諧
それハ彼夢想懐舊経文名号追善ゟ
発想懐舊俳諧こゝろ連歌こゝろ
外ゟなゟこゝろゟこゝろ
俳諧ゟ賤ゟこゝろ

歌作集うる事俳諧と異なりとかく俳諧ばかりをこゝに
も平書事ことくしくかく同じ
よ随ひ賤もらも有あるべく又俳諧も出生和歌のこ
階級あるごとくもくるしく
けり屑(クズ)もれが塵(チリ)よりぞそんしてきたる人の私(わたくし)が意地と
きそんとて文(ふみ)をつかうまつりて乱(みだ)れ書(がき)に用事と
あるごとくすべて筆(ふで)て賤もの字(じ)ほど用意してもよ人
からぬやうなもとくべし(む)き人こゝに伝(つた)へもおよ

義もかくぐおもひ和俳諧と賤もの字彼連歌のごと
五七次下小賤おと云ことみてとゝ
てめづらしく奥ふく又字(じ)とゝもれぐさうやう
連歌のごとくの賤もとらぐそれともひくべくば
も俳諧賤もらもの連歌ほ松唐(からの)李(り)ぐ
俳諧賤もの字(じ)ゝ或ハ連歌ほ松唐李ぐ
俳諧ほ節(ふし)李(り)素(そ)李(り)ぐ
物船ぐゝよ錄船(ふなぶね)ぐ
可(べき)準(じゅん)之(これ)個(こ)又一字(じ)ほ

返音ニ下ハ千白連続ヨリ
ヨ三ニ五ヒ九ハ句ノ多分一ニ
三字中畧マデハ次ベシ
ロクヨウニテ九ヒ
等ノゴトク五ケ小緊ノ
常ニテナヒマデ挑指ヨリ
ヨリ此ニヤヒヌム上行
音三字中畧下畧四字上下畧
下畧中三字畧一字ノ備音ニ
ハ次指音ヲヒクヒ九ヒモミテ
挑指ヨリ下ノ一字ヲ返字
白ヨリ随ヒクヒ畧ノ文字ト
ヨリ返字ニ三ツ目ヨリ
ノ如ヒヒ九ヤウニヒヒヒヒ
一字ノ露歌ハ寝ト音ニ九二字
歌ヒ三字下畧ハ二ツトハ人
中畧ハ獨ト靡ヒ九歌ヒ
五字ニ中下畧中三字畧

一字備者ハ化をひき〳〵白みる時は「化」の字と備う
て「毛」とやうしひ白れ中の音(コエ)と一字備(カル)と一字要の
いふれど音と備ルと亜よ区別ラーとの違めるこ二字
除篇いみそくべる乃中よ「錦」とふ字ハつべきを篇と
深きとてうとにツクリノ「雲おほこ」松あ〳〵ハこもる「明お
らハ月よなるも「家寵(旨ルン)」陳当も皆ふそてこひそう
ゆるべ〳〵「他系(工ソ)」とふハ白乃中よ「無」字あ〳〵ハまと
添てうべ〳〵「松」とあるハ此ものいもよるぞ〳〵てある
ぶ〳〵多き弟ももこごく百白みよ十白よこれべう〳〵ぶ

(十五)本式連歌乃変事雑俳よ移をう

頭日俳諧ハ本式とふ事ハ連歌乃ふひまのやうよ人
もそ〳〵く校りぶ〳〵てるとこれバ〳〵ハこも意とえ
ねよめこと思と秘ヲとふ人ハ変りと初ごる人
のふくるなるべ〳〵共ひとも本式のおれ方ハ
ぬりて真乃俳諧ぶ〳〵ふごくよもごうやう
今云もあれど本式とふハ新式とふ通

み射しまてのなお式こ年式ありこ式
国家心清水寺よ移りうてう今ことも式国と勇ひうる
こ是ひうれ式国この旧式ふ改ゆ
用ひらるゆうべ〳〵永禄乃比叡式六役ま普ひ旧
奥りうり紹巴ぞ〳〵出席とこ是後停止ま歌会りうこと
ぞ〳〵なお式ハ建治二年（住宅多比のけ）於禁会岌谷乃相ひ作と
うこ同比又中納言為家卿作おもうこと没ま普光園院
政医基公ま二条為之 鷹安又年よ没ま書加へおふと彰式こと云
建治二年より応ありま年まで七年よるこ

宗匠宗祇よ相談〳〵おひて亭徳元年（牧南宇比宇）よ書加へ
給ひと追加こ号と 応安ま年より八十一年こるこ
勅とうけ道遠院変ふて（牧柏原宇）お後乃うて文亀元年よ
書加へおふと勅式と栄と号こと 亭徳元年より文亀元年まで
号今よ勅式今栄として用ひうる式こ但此式ありこ名人し
説と宿〳〵おう事乃ありて書ふ加へおふと能変
ふ多候更ふ〳〵ていひぞうこ文亀元年よりと
元禄十一年まて元百九十八年こる建治二年より元禄十
年ま四百廿三年こるこ

○初ノ表十句毎句ニ名ヲ置ク賦物ヲ首六百句俱会一説ニ至テ第三ノ名處不レ歟作レ表ニ○名處与名處隔二五句一ツヽ三用ハ三句モ○同季隔五句中ニ無他季ヲ則不レ苦之連續二句モ亦不拘ハ書モ之○月花松毎ニ爰用レ竹烟各隔二十句一ヲ常ニハ七句モ○景物不レ連續ニ二句ヲ○景物ヲ景物隔二句ヲ用ル寝覚ハ勿論ノ事ナリ○戀ハ戀ヲ隔二句ヲ用ル寝覚ハ勿論ノ事ナリ○戀鍵物草木同名ヲ雖レ為二別物一ト遠ク為ル類ト○名残ノ裏六句ノ名ハ此外ノ如ク應安ノ新式ノ相守ルヘキ事ナリ

此外ノ皆應安ノ式目ノごとくニ而終ル事ハ旧式ノ通リ也ト雖モ新式ノ分明ナル事ヲ以テ本式新式ト名別ス俳諧ハ新式ヲ用ヒ俳諧ヨリ新式ヲ用ヒ俳諧ノ式ヲ歌ノ式ヲ用ヒ俳諧ノ式ヲ歌ノ和漢ノ旧式ヲ用ヒ本式ヲ以テ連歌ノ旧式ヲ用ヒ本式ノ旧式ヲ歌ハ新式ヲ用ヒ俳諧ハ新式ヲ用ヒ本式ノ旧式ヲ用ヒ本式ノ旧式ヲ用ヒ本式ノ旧式ヲ用ヒ

例ふる事なれりこゝにあまでも古めて挑落同式
立くらんといふで今れ誹諧よ毛多の新式乃ばゝと
彼是ゆふ事用ふる人ありて連歌ハ舊式の趣を用
捨してこゝ用ふるよのごとく誹諧よ毛舊式乃ごく
ふれバこゝある人乃ふまゝ歌舊式乃ごく誹諧よ毛
捨と加くく拘せよう答ふる毛此度時好ふで
用ふれバこゝ新式とあふ〳〵ゝ越〳〵

(表)誹諧本式乃用捨

○表十句但第三まで合ス發句ノ賤拘ヲ毛歌ハ十句ニ

○名處不嫌(ハヌコヲ)表ニ○名所ト名ハ
○同季隔(キ)五句 中ニ雑ヲ他ノ季則ハ不名之毛隔二三句ニ
但常連哥ふハセ句ふこゝ書ノ挑落ふハ五句ニ
定乃ふゝ同季三句ふて中よ他の季
と入ゝ事ふる毛三句ふてハセりの數ハ
例毛歌よ打越捻よ拘挑落よゆる毛方多く用ゐ
用ゐ方ごと

月花毎夏恋雑各隔二七句一 時ノ色平ふハ
烟ホ七句ふこ 恋ハ同什
本式ふハ十句ニ 又雑の挑落ふハ

こと変かうこと
○乾いみるくしほ一車ぐすべくしを回わうるとも
表裏うるとも裏ううとめるべくも
みちわうれどとも多くくりて
やうやうとめくめぐくて角俱毛歌物式おくくもて
なれど雛猫又毛引ふくて宇式ほ
とうりめうるまで考へ
表よてケーフツ多めるめ寝毛ぐくそのまでとる
まれば雛猫もう回ちうくべ猫よていめれて表乃

乾いみるくしほ一車ぐすべくしを回わうるとも
○景地不平濕三句ノ例ふる寝毛ハ浜辺男花のみのみも
○陰地と陽地隔二句ハ地毛歌ハ三句去之常ノ地落の
ごくく也是又男拾ほ不改
○艸地。草と木右同ノ
○林。檜原。園。猿俗ほる心類ト常ノ生物ノ名ハ義ハいあらず
○名残ノ裏六句
此ノ帯ノ地落ほ一男ノ生ハ変ノ歌ほ男べくし

(十六)或人向十躰く事、委此抔古人くの所
等、二六十抔を此抔とも二六十抔乃中よりさ
抽ぐよお此抔とみてもう二六十抔ともいつも定
つてもう数ともよめバうべきや又数とそ名目より
とやのいふ也歌ともを抔とうて多ちいふとそ
宗祇云等ハ二六十躰とハ廿八抔を申ふやや
連歌みも十躰ばかりと分るよう宗砌ノ事書ハ
も数と別ハ努く委ハ抔ともいふりめ
ハうべくそ申ふべバ彼十抔此抔とおちいふべそ

多くさでなうべからやそれ
まをハうべで此猶ハ別て度く姿うハうもうひふ
各別みふ抔ふとも
いかゞ第一不絶ひべきも不むふとも奇心そうれ
人くもも二ひいちおうりめをけるまや其
勅定あくハ道乃十躰ハ内ハづまうお抽ふべおやと
侍尋ふ申るひ宗蓮有家定家雖経ハ下ハ通ふ抔
と定一とひふとも抽政後成通具実家ハ有ふ抔と
ふ貴重極ふ此有ハ抔とふハハうれうふ胸の底ふ

つとめてあづ哥一首歌あづ紙捨とこのまし(ばし)ありべし
宝寛卿ハ称吉のときこ俗ぐまもてなしてまうせこと
せハかづやうもやうまうるお房あづ九寺とまるびて
こゝに俗やうある称一枚の称あづ成有い称
しむこゝろうそゝる称長(タケ)る称痩(ヤセ)もこゝ称とまる
びもおとゝにてかうして強力(ガウ)拉(トリヒシ)鬼称とそのべくもん
彼卿ハ鬼そうひしぐ称と寺九中道と卜絵つり
これもせとこいぐ詰二そうそのづくうめ今の
そのづかうべくと秘(ヒ)しまうまもん書九堂

やうこゝろまでのひる寺と考
逃て大名ん得る人今多くかてぬもん此通毛
こゝ実とまうべてそのづ考見申古今集もも実
ハ詰落真もひとうこうとハ今又九哥あり
もとも云大むひそんとりとするハ寺と称ひる
なるべくこれ彼卿ハ哥後成卿よ云哥云申ば
までやうのよ口乃邪ありてこうこゝろまで
ばうくねよ世乃今まん田十九ばち普る
てそんるるとんてそんるるやうこの人寿

みも入まりこそ海よりもありなん
ま狩とう人仕るべきやと問はまほしく
に後世ノ絵くるまいろ色くも着よそおふ小袖の等
と思考ともくうひもの多き事ふべくおかう
うふくろそれとうげきよべくおかう
ふ道そ肉（シヽ）とのこもろ天地と骨（まゝ）とこころを
海の等うやまこさも毎こさんとも牛の
今より等づもろうるべくなおつごうこおよ
八骨とそろるこを第一ふれとのおひけるう也

等ノ知つこおまでもよく味ひてこそ
道目入こそおし此外とうてる中つこまざ
節（フシ）をうべく後この所よせてこそ
ぐこそそんなるこ
ひつきとこまくまこさすぐこの例いかなる
仏此信やそぐくやんこも
男おうべおすし次ノ此ずてむ此例こ
事穢ふん故つの海こふ月こ夜ありて
付こいこ悟んこくく味のみるべし

たやう連歌の十一時ごとに定めこれを数とこゝに
もつとも多き是を進しこと多し 俳諧もこれ

玄蕃連歌

袖とぐ人のある気色みて　順之
○春日のうらゝかなるをいのり奥山
こゝもとに行んをいのり奥山
○なつかしきふるひとぞひとぞ恋ぶ君　救済
故郷とゐるまで人の祝をして
○萩うく風よりところとりし　紹巴

俳諧之

鶴のこゑ　紹巴
△池水よ天とうつる緑哉　弥妙
うぐひすぞなく花に春ひすぐし
○雪間よりめもはるゝびのもえて　順之
花もまもとよ雪ふる夜半の月
○わすれきとしも根や二ちとも　周乃
日とゝぐくなりと栄の昔
○此やまの面かくれる信濃にて　信照
雪くらし同と雪とかうし妙

長言祢

俳諧

有名鮒

△八十乃姥酒吸つ台のうえそびよ　永　如泉

○扨くて此川上に里もあり　敬阿

ぬしは此ゝ処なる舟つき川

○あつ場(ギ)もり水清のうえに居ながら　敬母

先よりの陰るむよあやき

△風と雲求又て異うに日ざりよ　永　和及

雑魚

水やのぞりてこあるうん

○あぶれのふかさもろむの枝　信照

こぞ〳〵ちんの数でもくさ

○このうえはこの乃方まて

△名をよそ向てそ飛う　敬阿

○まぶが居れそのうえ山ま　良弘

泉水湧(リン)陰のうえまで

△唐(カラモン)つめたぐを無(ナミ)れひて　永　幸作

月もろの来りけま

雑魚

水やのぞりてこあるうん

○あぶれのふかさもろむの枝　信照

こぞ〳〵ちんの数でもくさ

○このうえはこの乃方まて

△名をよそ向てそ飛う　敬阿

○まぶが居れそのうえ山ま　良弘

泉水湧(リン)陰のうえまで

△唐(カラモン)つめたぐを無(ナミ)れひて　永　幸作

月もろの来りけま

○三嶋路くもりの
泉涼しくふく雲間そゆく　京乃

○信吉乃浦の面も月さえて　救保
ぬる雨もさらぬ雲なく

○こゝのやいろ八重なる島のうち　信照
百目の葵白桔梗の庵　京言水

△佐おい鈴くら白粉の庵　京言水
未来よりかゝる妹の白髪

○山乃端の雪ハれりて月さえて　信照

ハつ猪ハ
面白神

○なつかしくも世とのがれある　京乃
○こゞろみのもろふとぎすより松て
さゝやきこゝろ書ふるくやゆる

○妹こをゝ屋の居ま人住く　秋乃
うそとやまよ二乃あの爆

△蠅ゐくてこゝろ称やを紀家守　勇招
人ゐこゝろ通ぢみの通

○乾乃夜ゐのすゞしくぬり紀美　京乃
こゝろゐなゐのこゝろやこゝろん

ハつ猪ハ
車乃死神

秋猪ハ

○舟と捨る業平高やみの煙　信照

　まこ雨よ[illegible]ばらくハまちやきて

○舩よそのまゝ[illegible]れる水とゝくめ　吹兒

　葉ぎまに綿と[illegible]ろ

△鳥[illegible]と生(デ)る鶯煩(ハヅラ)ふと人ゐて　永望

　除れいろハ袖のうら秋なり

○行水よりかゝるころの三日月　信照

　まり日数とびるこて来まろ

　まるまでこゝ～余といふ夫

敬阿

秋猪ハ

冥吉狩

　手野ゝそのゝ[illegible]ゝ

○あべそびよりとハをさゝれつゝ猪　十佛

　うき名乃うぐひとりつゞを武士の

△うぐひすふ陸の苗と来てころ　兒湘和

　雪とうのめてゐてこをみも

○ふづ乃猴ハ人ゐ猪もゆるして　順兒

　いろ多キ葉下乃うら

○猪よりハ[illegible]ハ[illegible]ゐ[illegible]ゐ　良乃

　ゝ下もゐるもうまろと

強力体

○絶ことかぐらしかを川乃ゐ　　名所
つまつくと祭礼の行莽乃足
○うら枝より穎（カホ）となぐさむし　　共角
○かぐし之姫れ面とうかがひて　　閑乃
みぐひよるとゝやるこゝろ
○こゝぞ此神代久しき身宮柱　　救安
食ものゝ人に来てみぐしき
○老れなうかの髪のみとゐて　　十佛

（十七）

○但此外 約束体 過言体 幽玄体 深遠体

△その朝日乃さしくるまでに
おもれ遠（タヲヤ）とゐるぐらうやう
寺乃中よ落ぢの月
よゐぐよ
ひそめん寺と約やう
アされとぞの名のはけ
体と申ものなよそ

（桃李）

（オニ）（セツ）

ひねもすくゝ波を幽谷と心得ゐるよ
大やうれ如古乃ふへらと遙ゝ行るう古人の幽玄
とも乳ふるハ心とゐれ用とやせ
ふ波乃やさゞこうれしく公のえんるふへゞこ通し
人と波と刷つゝ猪人乃まもやるハ人ゐる
ゞとこゝとゞるおゝくくうゝをハゐうゐべ
身波ハ五尺のあやゝよ水とうゝるゞくゐゝ幽
玄神ゝゝ

○又云仲一云白神 海ハゞゝ長云仲ゝゝ
つゝゐれ出ゝる波うゐべゝ仲ゝ長ゐき神ゝゝハ彼卿ゝ仲

ら神ゝゝふハ神ハ生海乃ひうゐでいよまれねをゐ
ゝと別ゞ幾白ふゞ大ひのもゐくゝやうよとゐくゝと
ゐゐうゐとゝ仲ゝ長ハ彼卿ゝ仲ゝゝ
幾白ハ幸乃雪吹よ彫ゞゝゝべゝうゝ人仲ゐハゐゐ
とゝゝのびゝゐ地ゐゝべゝゝれゞも幸を撰集ゞゞ乃
ゝそゝやうふゐ乃ゐれる首座平首吹神ゐ神ゐゐゐゐゐゐゐゐ
ふゐゞゝ式風情乃色ゞゝゝゝゐうゐまゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゝうゝう波光乃頭ゝそ日ゐ和ゝゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ハゝゝとのゝ仰うゐゝべゝ故よ仲と
いろゝよ定ゐ重神仰ゐるゐべゝ司ゐ仲ハ彼長ゐき

中にもこの風情と云ものしるべきなるべし定家
卿霊豊天性なりしかば稽古かうしん時宜によりて
なるべきにや 濃体といふもこれなどのやうにてたく
みのまゝにめづらしきを本懐にすることなりしかるを地
にも悪(ユご)せぬにもあらずといへるは云ぬり自然也
位ゐなどいふことも発句にても付合にてもいかにもよろし
きる頃よりひとくみのは出来べきなり
○有心体の中よりも 物哀体 長高体 理世体 撫民体
鬼拉体などいづるなり此 有心体は定家の説によりてもいかに
おもむきしてもそのみちとうしめしてまゐるとぞ彼

卿此体を鬼拉とすべしとぞの給へり 物哀体はおもしろげ
なるをとゝのへたる 理世体 撫民体などこそ此有心体の本意なり
て行べき事にはあらずといへる心ざし 首尾も仮聖代のごとく
なるべし 鬼拉体は其深切にしてまめなるやうにふくみぞ
詞もおかしからずすぐよきほどならずしてちかきも面白き
風情おもしろけれどもいんしんの 鄙 と云とぞ
○濃体此体の中にはいでたる体もかうしぬるが定家の
説には此体と相撲(アイカニ)て秘伝の体によりてあひて詞ぞ
りひたぶるやうにはげしき風躰をまなぶべし 優(ユウ)なるかりかう云
うもとをりのもしらうへに(ゆき)もとぞとるれどもとぞ[illegible]

連歌俳諧ともに第一こゝろをよべき事
こゝろの一字の義と申すことなきやうなれ
らくだくさつそくりやうとたゞ
あるにも通ずといへども
なるべきれど別て此道は邪(ジヤ)の教(オシヘ)と申ならん
うべくくしたゝかなる句を
ゆゞくしきまもりてこゝろ
こゝろをよべくもふかく学び
よそほふやうにまかりなりてとゝもれど非路
○蕉俤より 毎首俤 乾蕉俤 発句俤 俤〳〵俤 をく

一ひとつ有よの物(ブツ)とえてこゝろづくべきにあらざるべくてこゝろのやうはものくさのなきをこゝろえてのみ
なるべし初心の人ごと事みや
○事つ動作ともと奏遣体 授群体 見振体おこなひ
こゝろのもものくさ云(イヒ)おもてあらはしてこゝろせて事のたゞひとつにこゝろづ
こゝろなるべし奏遣体 授群体おなじ見振体おこなひて
体あるゝれるとこゝろあるべし
よおもてごとくの動(ウゴキ)やおもてにあらはれてこゝろづ
とごとくこゝろこゝろあるなりこゝろのさとぞ

一節体定家卿此体といふ
よこゝろにふかくをけるまでそ但し現未(ゲンミ)既(キ)
おもしおもなるべし一節といふひよ
つて筒尾くゝもおもせんべし一節といふひよ
うまれどもえどもて節をよまんまでせば物語よ
やをうべきのすやはとこゝろにて彼十佛句の事哥をおも
野よ續くく集とまれとゝ句よ翻(ヒルガヘ)
路なでおもてあらと来熟(ジク)
いてこゝろまでおもべきなりこゝろ
○寫古体定家卿此体と初つ

空(カラ)ごとみえぬ句の性よろしからず物のかたちをひきかへる
新しみとしべしむかし此作今は人ごとに句に綴(ツヅ)り余りてある
句なる事人々も年々別(ベツ)にあらず詞文別なしど爺
は是とさてはふるきもの面白き風情との入月とさては甚
出しきと思ひつゝもからのべき事にあるまじやうちう
かの句ならん詞なりし一字のよぎをそえて新なる不可説(フカセツ)の
事なるべし今ともれ不破の関屋の板びさしに新
しあらばそれ板の風情京橋新に奇此其の字をそへおぼ
えしられど堪能の人の句ひけるとぞ今の人皆は
通(カヨ)ひ作ればふるき句をしらぬもとめ又との意が心よりかはる

句は明(アケ)つぐしき毎ゆしがしたがひてするやうにあるが故(キカウ)也
事にて余りことのもとぐむしの内なりと定め広く
ことわりむすると知しぞ堪能の人は天目杜撰(カケハシ)とりけのぞ
歌すれつとは○よめぐしす大きある時は虚空(コクウ)もせず
くらいさき時は芥子(ケシ)の中にもあそぶやうに作るべし
とぞ撰して古き新しき又は堪能不堪とも明むべき
物なれ此間古作と云はむと付てこるべし古今集には
分しる各別の好むる人あるよしま古詩古歌の面
かげをひ作る句は永ゆうに長あるく作るそうし
○強作 拉鬼作 定家卿は骨(ホネ)を似(之)して餘情(ヨセイ)をとまされ

ある數之個此わをれてるとこ本よりめくへもうごの病
あるくへ第れどそ我ふへあるごず骨(コツ)髄(ズイ)乃毎ととと壽(モツハラ)よとる
第とのづくくこそれいそみ行るるくこ此神と茶てらく大一
裏大極殿のる庭よひとくりあてもうてめやうれを
ごくりうとそ又彼ら故郷に有し母妹風濕猛藏に無く暮
雨魂おとひ出よ旅うめ乃吉乃妻みくんきのみ乃妻れ
旅乃心ものにうと十件の内鬼拉仲よ入るくそ奇(キ)妻
う事こ此毎常と定毎つ別て記録とあ一るよられば
通ふ兵庫こくと第ともくべきるめや
依此十歸此神を書ふしつとるる事こいうあるる

めや連歌俳諧よきくて仲と極て句と作るこれふ
ど知くでもふうめべきるるでふとそとくみ
事かうちひ爭論不絶(タエ)みりやみくへ
このはりくいまうの通みてるるあれどかうえぬ方
のをとせていき悪の名別と悟ひこごめど次(ツギ)後よあも
ひとこまうそるる名れ句いうくあに誉(ホマ)るこ悪るいうこと
とよれとれば父母あと堅遠(タカヒ)成ハ一句れ善悪もせび
付句れば句いやもくかにやゆるもて迄ど第句へのの
ふのてうずと自他乃名別を不弁(スベ)してある

味ひなし句付るには一句の意をよく聞と云ふも不詮な
き事なるべし案じて取つる其のまゝ又は衣装を
着せかゆるがごとし又一句のうちの合付ぬやうにても下々よ
り付ける事なるべし是又付すまじきを捨るがたるなり
と古人も申されし類に貴賤と前句を作して云
替ひなど言ふ事して見るならば歌出に海の風情又ハ士農工商
のうへも作るべし海なしには海に入山なくば山に作り
又田民の心にまかせならはして侍らう知りて欲気
の句をも付べき事也他人の心を知らずして我句ばかり
と深めよく作り出しても何ぞの事也案ハ能ねるの

算法と云ふるに先ツ歌のおこる人此賢愚をよく弁へ知
りてんりことはめぐらせるに必勝利なるべしいふも
有賢なれバとて歌の意を知らずんバけいこやくにたゞつるに
なりぬべけれハうやもとるべし兎角一句の上へ理まで
てうるハしくとも前句へ付ざる句をとるものハ何ハ益なか
き事也奇人の諸を作るハ奇ハ題をとりて沈思し
て出ひする所に妓琴を奇特よなり作るとても不能
俳諧も前句への付ざる句に云ふぬる事何べし
(十八) 追加なとなれに作あまりなるハ古人の句をとし
○本に云ごとく十禰然宗祇ハ連歌に十禰ありとなり作るに

ようさぐも別んと好ふ不てなるとゝ兎不宜多文明十
四年十月時とや改変原十如院前自分二此宗旨宗
揚井ノ元作まゝ至ゟ自の意味と同答そうゝ丸句
1長祈と持ゝ作る事ゝ
ホのかゝしばくのごとく後退のかち勢こ云ゝ云
射して別ん事をハ後
給ゟ知ゝごとくよ甚ゟち亜ゟ作ゟ少ゝ知ゝ
お句 こゝ切ゟ忘ゟ
主人作 賊ゟもしその業ゟ意日ゟ拾ゝ 宗祇
お句 雪乃明ゟの雨ゟ夕ゝれ

四手作 暗ゟの吾風測時ゟ雲ハ水ゟ行く 同
ゟ二手 待時ハ女乃別ゟ夢ゟ 宗長
ひまゟ
ゟまゟそ
お句 むよむゟ
捨骨作 ゟろゟれ人ゟゟ歌流て 宗祇
お句 ホをゟまゟ
種類作 移屋ちくゟ屋ゟる横ゟ 同
捨手作 云もゟ頭れひゟゟれゟ
お句 今ゟ川ゟ清 宗長

於?家作
又?家作之云
ものごとに跡なくなるや空の雲　宗祇

?ゝ作
嘆むハ野もけ雲のごとくなく　之作

発句
たのむひかり秋の法の月

さん世之作
肩語をみなく後おとろへて　宗祇

発句
たのむとぬくうけてそとけ

一?作
みどり子も中りに髪をとりきふて　宗長

発句
氷落山のいろそかはる

二?作
なき人を送り捨は六袖ぬらく　同

発句
なちか枕をのいくちくさら

一?作
風さえて難波江　松木書　宗祇

隠?作
梅ちらちひいくはかなき　宗長

発句
竟しこ菊こ霜のをしは

根?作
こゝろえ山をはる沖津浪　之作

発句
打しかとともに秋なき台

伊?作
浅ましき風にかれ野よとみひく　宗祇

別?作
人をとらふを
たのしひとたはたの旅人や　宗長

発句
葉はらなる雨そけはれし

吟?作
三の曲雲より奥の塔こえて　之作

おなじ　　やどりそめけむ
おなじ　　こゝろなき身にもあはれは知られけり　　宗祇
おなじ　　しぐれつゝ山里よりや帰るらん
おなじ　　とまるべき人もなきよの秋の暮　　宗祇
おなじ　　おもひ出もなきよの秋の暮
おなじ　　行末をかねてぞ悲しかりける　　宗祇
おなじ　　なかれてもたのむる中の契りかな
おなじ　　はかなしや思ひもかけぬ夢の内に帰りて
おなじ　　ふりすてゝ行末遠き別れ路の名やうき　　宗祇

大意一体　　露ながら
おなじ　　こゝろなき身にもあはれは知られけり　　宗祇
得る
おなじ　　人もをしへもなき世なりけり
おなじ　　風やそよぐ
おなじ　　雲のたゝずまひ
おなじ　　契のまゝや
おなじ　　われも捨てうき世なりけり　　同
おなじ　　雪ふかき松をそ風
おなじ　　雪降れば
おなじ　　こゝろなき身にもあはれは知られけり　　宗祇

古乃内よい道九大秘事一ともなふ
〳〵々毎よ心とゆて見ねばならぬ

㊾ 六義之事

○風賦比興雅頌ハ哥乃六根ともいふ今集の序
貫之六首とうて書りさもこそ秋ぞともいふ遠ひめ更ふる
あや公役卿風の哥ハ是非の詞をそなへどもよ
賦とくべめとうてハ真雅頌までハ皆ともよ
おもひよるよふ哥をよくくふくれもり空の境

よい元六義乃根なハ色詩ともおこれりまうふ
根見うてもたるともやうひとつやうひとつ
天元ひとさい六種〳〵六義之色持ふ風雅頌の三ハ義賦
比興の三ハ体之ふ和哥いまふ多ハ色雑と篇
めう〳〵六義皆体とゆふて貫之六義の名目をうとて
めく〳〵ふるう色持ふんとひと〳〵ふやひと〳〵ふぎ
ゆや公役卿又ふ味ひ事ハ深りうや哥事ハ更
あくていふるうめうふべし連歌ふ大ふひくふう
公句毎ハやふべしと心敬僧都云おとぞ宗養

そもそもあつしとくしても動かぬ重されし句どもさとくね
ゆゑむと信用するも云ふ文字は味ひえぬもかまはず太やん
を誹諧へつらるにも明る遠ひもあるべしこれは今
貴賤ぐぐうて味ひとおめ分かるべしこれ六義のうん
ひらけく古人の詞と象と書籍集めかるたよくあるし

○風

風の字をきくともこと人にもあるを事といへども
こんとさうしする　定あての従ふは順と云ふにはなりかえども
おもふ也今てこそあるまゝたよしく風の事とくあるべきや
いふあるけるてもかれけよせてよむと風の事とふて句合
云あるべしくさとらも明ひべし今ここに云ふ歌はあるふれ
ちる句あれとも数俳部の事句に

答はあるく聲ははあしからぬ　救済

世二ノ条大閣様と郭云ふそろ人講揚しまるあるべし　払ふ
そうて句をこゝろざしとかくもと風の句をきるべしとかぞ
此心をさぐりて誹諧よいちく

句は思ひを
菓の花よそくなりせ

其人作のうへはゆかしや菊の花　大坂　合粘

何るは方にあは君は生長を旅ひて
は大阪明は後見の人は秋をとられよ

個性次めどもみは茶書かしねばあらはるを拝く知れぬことを
あり抄文頭發句ありくもちかとこかはさとしてこそ
いとも海りしるものかるべおすむ江戸山川とらやあ今
人五味の題の中に酸と云ふこと

於る　歯と梅賣る者の洞ハ

是ハあの句も風の心よりおもひよりやすからん

○賦

問 くさりもの句をとるとは何ぞや　答 花符又ハ賦ハ虫二
陳其事ヲいへりなど一倫まではなくてかくの様とつまびらかに
云のかる品第ヶ題れなどをはらしてたちによさとつもりさらに行かく
よろしきひとつ問かてみてもらふことをとへ問へきとうそよみさ
ある是れハ定家で読まも賦ハ寄人のかけ養之まで大人の大旨之とそ公
まさく味ひ知るべきことも心敬僧都も歌の事をよ

問 出る日ハ四方めりとみまなりは　竹之

是ハ抱ごとは心とそぐりかようしてる句に海やらまんとまた
とみくさり此句よ趣じて又誹諧よえらば

問 花よおそぶ虻なりひそ麦蓬　江戸 梅玉

是あやけひかるべきか但し此作よまで返し心がれ似み句どりして云

問 風ふきいで花ぞ入て居る大非日　京 春貞

是ハ多く花を集るといふことで賦物を付ひかるべし

又云

問 作り菊や柳と桜をかきなて

問 蚊帳釣ん柳桜よ松楓

是等ハ花多く云集るといぞひろそまて賦のりよけるべき
句よハあら紙を縁よ求めてひて花多く云集する句どもえ
らとそうるこそ云不たらも此味ひと見へ知るべからすもの

但大非日の句も花やらて居ると他をとふひやりくる
いよ云物くいけるべきとおもえず

○詞

〽あらましハ事を物ニよそへてあらましへるゝ類と見ル事の物ニ似せてかるもあり〽たとへ
ハ云ニハ似てかゝはる事それからおもしろく思へりハやゝまたあるは云二つは
かゝはるらしむらしてくさしてるひかくかゝはる事まんハ是ハ物をとりて
物ニ似するところ世俗ニ有ル方とふをかくると云ニ同じことと又貫之
〽事をうかゝ彼〽君ニけさらしこれ歌のおもてにいかにかいはゞ
と歌ニあらましへ起ルと主ニおもふたる事を見るに見ると又方に見ゆる事の
ほゞうらやまし定家卿の説ニハたとへハ事ともの物なぞ見えて
大かたハ物を物ニよそへて見るべし〽数後部の事ニ

〽下紅葉塵にまじはる宮居かな

〽是ハ彼〽起ルを〽主ニ見するなどとりて〽散ル〽塵相ニ見るさ
ばとかりて引合よせし我するのみや是ハ誹諧ニハまで

〽寄りやみかの〽宵出夜半門の雲　池元

〽是則〽二なき日なおもしろくするに〽下の雲の貴子ニよせ変化

と御代乃影万代よにたとへてひどみて云ひあだとへ
へるあるべし　但是ハ言ハれ云はれる事ニ退して引合之
〽彼類をえて物ニ似るとる〽又たとへてうるおもしと云而すかけるべ
さとも〽かゝると非此分ちを寓乃所ニやくべし

○寓

〽たとへ寄〽たとへと云ハ一物をかんてよ物とうせてくらべたとふるも
〽荘子乃説支字なかたゝ人寄ハ其人寄ニおかゝるもいるなと云ニ
〽其人寄ハかくしたとへ〽寄ハかゝはることぞ云も〽述懐ニもえ
事をさかしくまたとへてよめるも寓とも待またとへとあり
又ハ人とハ彼ヒことして是ニみぞしつるとぞ

〽又字彙云　〽寓は寓の三ハ寄也に託する也　〽寓ハかくれ
〽寓ハおかくしてまこと又云〽ハかりのよ寓かくるまこと答へきなり

ぞとうらふなどもてたくさん媚諂(こびへつら)ひ
云ふ人どもぞよりもうるさく諛(おもね)つるよりそれとぞ
ふらと宅家卿は奥より二十そうの碁盤奥の簾(すだれ)奥
へ今れ給ふ奥とようとよう第奥は四間のわ前(ワリフセ)より通
ひて奥にうるさくとよべとぞ畢
竟此間は奥二枝のむとおもふよう通ひて其
下別(シタワカ)ち間はたゞよそれとおりひまもとそれよりう
ち地しそれよさうぬやうなそれとさうする公
大やうそれとそれと別(ナラ)べて云ふ奥は称(タヽ)ーて云ふ奥は称(タヽ)

又称(タヽ)ーてをとよせてたくさんうるおよそ媚諂(こびへつら)ひ
ふるよそ地ふうろうはよそ逆(ムカ)ふ称(タヽ)ーて
えうるさくべし公家侯爵部ノ川白うい

五月雨(さみだれ)のうひの委風(ゆふかぜ)の水

と云句を書て是は其地よりゆくうるとうるう
たくさくる奥の句なるべしとふう川句をとりて
地二ツよたくさくて云へ片(カタ)うるべし
ぞーてをくそれうるうるぬふよう称(タヽ)ーて
うりうるぬふ句は称(タヽ)ーてをくそれよりうるべし 此情あていそぐ

腰や揃（ユエ）挟切れ蟬の勢ノ 京 真隆

折まろせ寄たく人とこゝろぐもやうひゆらん〻右人
のゐるところをみそなはしてそれが遥〳〵そゐるゐ
個所のおくまでもうつゝなうのれどもよつゝて汚無
ゐ俗ごろつゝき石をよう石の白ごとくいる右人のよ
造ひてのゐも被（カ）汚いろ〳〵真（マヽ）ろうとゐもろ（ワヽ）ろ約ろ

比（ヒ）

無

おゝおや酢（ス）貝（カイ）のごとく二つ里

姉の白二里と酢貝のごとくてゐと酢貝のごとくゐ

廿ろゐをとゐおゝいとゐとうよとうゐひゆらんろ風
ゐ白ゐあゐ和ゐ酢をとろとる貝二ツと冷（セヒ）酢（タイ）酢貝のごとくを
て二ツとゐ縁（エニ）よごりて里とゐ（イヒ）おせろとゐとうこと
艶これもそれとろゝろゐろゐろゐつよゐひゆらんろ風
やとろんろもおれ二白ゐまを歌よひるゐんとゐ遠ひゆらべ
れど古人の組ごとくさごりてうくヤゆるれたぐちれ
こゐやうゐるを明ゝろんとゐね人よまうを

○雅 とろこまでうろんゐをたうくをぐうゐくゐ
ぞくろも雅ゐ設をたぐしろゐよゐしと母ゐよ賦ゐ雅よゆろ
やうろそゐうごりるルゲ雅ゐ

の義なり十二句のよ
又意非の句のをらぐ
他あるひは
そのほか宝てかくごひ初よりおつるところをとうや
頌いろひ寺毛持よる頌八米(カテ)威徳形容成功而告神明也(ニ)
又頌八誦ど構造(ツクリ)ごとく頌の容ど誦ど容八王者の威徳をとくごうむ(ニ)てうしろど誦
宗祇ど頌八容ど誦ど容ど同じ故に頌といふ寺とも又
かくごひろがるをひろうてうしろど誦ど容ど同じ故に頌といふ寺とも又
とも世とかかて非よ考るもとといつる又頌ハうしろびやうしろ
こそろごふかれて言葉(コトバ)よはべ〳〵非よ考るもとべ〳〵 実(ジツ)ごと注頌
の非ひよ考るもとべ〳〵又頌頌寺とうてうしろうしろ
かひらかれどもまうくる詞をわうてうしろうしろ寺とうてうしろうしろ
頌頌寺とうてうしろうしろ寺とうてうしろうしろ
う毛とをとつよ考れ頌頌ごとくかんうり行ろうやれよ

味ひ明むべ〳〵又或説よ天竺(テンヂク)にて伽陀(ガタ)訓ごて頌ハ麦(ムギ)ごうつく
しとむかしもろ考ご歌ごとの意ごて伽陀ハ梵語(ボンゴ)の訛(クワ)ごて
毛(ツキ)持ごうけるおひごの外
かくのごとくひろがるべ〳〵又宗(シウ)ごと
非よ考る指や代ごうの意(イ)
非よ考る指や代ごうの意(イ)
とゝ句ごと川移(ウツ)へりごて宗(シウ)意(イ)ごて宗祇などの説よ
ひろうてひろがるべうや彼(カ)もよごうて説話(セツワ)のごと
代(ヨ)よ考(カンガ)へ契(チギ)ごて非(ヒ)ごとの 永 圭燈
意(イ)ありや叶(カナ)ひをすべうやうつくごうるべごとう
在六義(ロクギ)ひごとくごとうひて肝(カン)ごとすべ〳〵説話(セツワ)の戯(ザレ)

言よびそれぞれときのりて
中よりも悪しきまことある
ていい悪とありぞけ善よ
ひつもあいる為物変相とみ
と得風賭は無推須
のりとひとわるまぶ
理世指民鴻徽賞心楽

○篇序（ヘンジョ）題曲流と云事ハ五体之六義ハ和哥の六根なれハ此二ツとたゞ明めゆゝしき（ハツキウ）諸（まうロ）篇（ヘン）序（ジョ）正流通（ツタイリウ）周（タト）囲（ヘ）傍（ソバ）らの喩（タトヘ）の有よ（ユ）ふまでさうの事

○篇ハ五文字もて句（キ）をなしたるまでさうの事

○題ハ第三ノ句（クニ）のさうの事

○流ハ第五ノ句（クニ）をもて出るまでさうの事

○曲ハ第四ノ句（クニ）意（イヒ）訳（ヤク）とてらひさうの事

○篇序ハ哥（ウタ）の初（ハジメ）終（ヲハリ）の句（クニ）数備（ソナ）はれハ難（ナン）義（ギ）なきとこそ

○篇序　家（イヘ）と仮（カリ）屋（ヤ）とをふまえたる事

○序　縄（ナハ）ばりの事

○題　枝末（スヱ）ともいひ假（カリ）ともいひ造（ツクリ）ともいふさうの事

○流　成就（ナリナ）してうつりうつるさうの事

○曲　造（ツクリ）立（タテ）て家（イヘ）作（ツクリ）業（ワザ）さうの事

それハ哥の五文字をかりて仮（カリ）作（ツクリ）をもて句（クニ）をなし但哥の五文字もて句（クニ）をなすとも度（タビ）の句（クニ）までハ五文字をとるをいふなり下にあり（アリ）すること（コト）をうたふ（ウタフ）をもて歌（ウタ）とはいふなり仮（カリ）作（ツクリ）の此事（コノコト）連歌（レンガ）哥（ウタ）仏（ホトケ）哥（ウタ）にもあるべきなり

やと（ヤト）云（イヒ）おとし（オトシ）入（イレ）ていふ（イフ）ハ仏（ホトケ）哥（ウタ）の句（クニ）なり

俳（ハイ）諧（カイ）の句（クニ）ハ曲流のみにて篇序題ハなくてそ

更歌引白　羅ひいとをひくべくあれ

○月ある時橋弁慶の事　救済

入てくる面とみうくもとをり

○うつびおれ心よ俠気（スイ）拍の取る拍子　若乃

氷とけてもよりかゝる野辺の石の下巌　頌充

此二句は第九句下の白と曲のみありてもくるべきくれ

句と来るべきくは句と曲のみありて第二篇序頌でうもうて第句よ

ことわりといふ也とおもふ

此二句は第九句下の白と曲のみありてもくるべきくれ

○乱てくる　若乃

句也て第二篇序頌のみありて第句よ

おなじ下の二句とこれ

○出てくまで同じことわり　信照

此二句は第九句下の白と曲のみありてもくるべきくれ

○乱てくる　若乃

句也て第二篇序頌のみありて第句よ

おなじ下の二句とこれ

○出てくまで同じことわり　信照

○右のやうにくく奇妙なる曲

流る下の第二篇序頌ともに五つ迄有て第二篇序

題もる二句曲にて四句にて第二篇序頌とるべし　序奇

みどころある曲ぶし

なでさぶる岩や五月雨のころ

ちさ湯のやゆとうあるじ

もふの扉一奇又中うやとめてるもあり

そでみそきくたもあごろれ〳〵衣ぬをどしてあみ〳〵

鶴翁舷うたんとそる武吉氏八十宇治川のタやこのを

みどの額ふも歌もまふの寺と味ひてやおもよゆづり

扉ありてそそうとうり見一幹ふ古人のおとは風幹

ひとゝも筑波集みどころ

秋のおが妻乃ひくしまてうろ

○そそさせてゝもおもおもあ繩　信順

うつゝ夢うつゝてそそめ

○誰よもの荻の葉のそよぐ風　周乃

ゆふもたゞうらさびてそ

○人のかよひぢそうき世の中　綾公

是ふの額ちをまいと奥ふ

あるへくゝ彼もの如ー決雛猪又のをえどしてふ

筑西短冊曲流

検挟（ケンキョウ）なるこゝろ共　新

付白長篇序頭にも見ゆ（タヽミ）　濱石

同じ　　春吟ぶり面白くおもしろく

△道廣く雪下駄の（ユキゲタ）跡のうつる山　名不知

おなじ長歌曲流　うらさびてこぐ（エリ）舟ゆくそこ

付白短篇序歌△鄙（クルハ）へまで古郷　茗人

同じ　　今ここにちぎく月の秋よ

△まよなかのいろ島の朝よ　永友元

おなじ付白結序歌ふけて　おもしろさ

△うらさびてこぐ舟ゆくそこ　大坂　合笑

そのこと歌もうるおひ　　しるし

しるしあり下のもみぢ　　てこのもみぢ

せのぐさおもしろく　　とりそなへ

逸（イツ）物くらべ　　ぐらも　　但奇なる曲と云ふ

おもしろき序の句やもとめる句と云ふて一首とする

山を指おもしろきこと　　なり

おなじ序正流通として　　感情（カンセイ）

絶（タヘ）て怪しからぬ　　ことなり

として表紙の濃（コヽ）　　眼（マナコ）

事なれど奇の篇序類曲流よ相多くり詩みも
起篇格合とくるさ報序篇序類曲流八旨句とも率
句とも續け作る時よ純ヨリ得てもくべくこるみ篇よ
曲流の次ありくべ篇序ら云ふ次よ曲流の
ムとも次あとくどくてりつくべ其次ノ篇
序題ノ次にて二句之と性よ云ふどもくべ一時い
篇序も落北逃猶とももくべ一茶よ篇序
類二句續きたる次ハ又曲流ハ次よ付くべ一時の曲流い
一句ノ也歌一ヶ所ノ雛鶏ヒハ得べ事ム逃猶ヒ也歌

ムどくく猶逃ヒともいはくよ付くべ三句ありくれと
くべけくこふともくべ一句ありくべこるみ
百句のこふみもつくべこる付ら

(五)親句味句ノ事

一連歌雛猶名別ノ
犯ちおくるまとくべ其親句称疎句称ハ乃ニ
ハ也歌ち付ちくべこるみ雛猶ヒハつくこる名別
ある人句ノ付ざ句ノ疎句よ多
事多ハ也定親句ち歌云

俳諧を親句平懐の
一疎句へけるかの
事くくとそ宝永の奇
妙のとぐうにあくりれ
ゐべいつゝ主歌俳句を
とりくるやうめと云てり
れ句前属そつゐ句と仕
社とおもふ人ど耳かさう
多くこゝかゝと三句落着
ひぐこゝゐべ

親句体よろぬ
ゐるじやくる
斤量の里好
ぐもそて
疎句
おもよ親句い朝ゐたる
こくくまゝ其姿
ゐべ大やう尾松

かやうにかくまでハ又新式するものもあるまじ
但しく云ハ初心中にハ学びの前之堪能ハ作者よとめ
又ハ此親句稀にてハいかな浅深ありの事ーを作り出し
侍しんと知べし次疎句ハ前句に縁ある詞をとらずして只
とふに志をあるよりかぎりなく遠くりしひきて一句を作り
出せる人あるべしかりし句をひくる法師が其の巻にある姿
ともなべし是ハ但親句疎句くと云ハ付んの上よりの作
必しも付合計にかぎるべからず一句のうへにてもある也
發句なども此二体ハあるべし連歌誹諧ともにそう云り

親句　うけや花吹よ絵どく紙合川
疎句　花まじり雲ハ書也の締り
右親句とよれ独言云乃れ句之いづれもとまうれのかわりに見
えりてハあらさうくうつしてらちし実相之とらち
誹諧　親句△唐崎の松ハ花よりおぼろにて　江戸　桃青
疎句△あひよて哉もいつ肴みちる　大坂　宗因
李吟云誹諧ハ云之耳ちくまとりくれるりざなれバ疎
句れ稀ハ目跡路るぬなりちかんするとりや又古人の云親
句疎句れ切れをもあるべし次身よ前後し道乃みかあり

宝く疲ひえてる白ことを
きりて世れからそれとを
る是を有之体とそ
ここまわるよ家の棟
うべ〳〵白ぶそめぞ
人よされとそいぬだろ
ろべ〳〵とそ白とりて
それだろとよ幼脚の
△敗の翌やうけ
るようそれとそうる〳〵
そのもくそ意筆皆
ゑとそのどやうよやり
たろめるとそとぞもろう
ゑて共なようやそこと
つ作りてそこ格みをも
なくび仕事流人とりひる
なるべる仕いろひちろ
つとるよ埜もおくそ

と申す文体 ござ候 それぞれ
もるよいあんばい彼の秘書古乃都久
り二三ヶ所ござ候のどやうなる
ぞござ候是とうふの陪と
ま三ようてうてこれをそ
陪どこ面へいてこんござ候
ようの我物こんうま歌と
めづらこ一句とござ候
あうでござりきう
面白ござまもなれや 五月
此句のずもあくござたるまであくこともさ
御ひよ茶をおしりがござて通よそひござる
こうござ候月よむりのて面白キヲのようなやうござ候
るでうら御たず言ござまよおうござまもなれ
やとござ候一句の曲とござ御
そのうき文 面白や笑ひ

来る亀角ござ候道の秘伝御必門よりござ候
事なるべし白とし
面白ござまもなれや 五月

是までは娘の字まじりてしるしてやうやう面
白やかし答てされどもなほさて笑ひと侍る句あり
かの浮世節も陰月も陰時節相交ひと叶はで
嘆かれおもしろがりするを上西もれ寄へかけしと云ふ
月やいとのとふてとるかたらがある所にて侍る此
寄とも下心よりけるや彼是云言葉にて
出するとよりもむかしより出する句也
は是より又此むれてむもとれ本より
謝がきて月と猿やりしか

是有文のやうなる句作ともいふべし
一月とあてて猿やりしがわれ
是無文之句ことをなきや
又此無文と云句は隔句作りにありて下の七文字へ
云は五月かねて中に仕立たるに下の紫
ゑみえしところをふくと任せる事にむま中へ仕立
所とばかり詞ばにおしゝ下へおしゝて句の餘りにことばのくる
(十三) 真行草之事
○真は題の詞をとり句ひするを云位敷術正

ときさへ唐は束帯(ソクタイ)の姿とみるがごとし付合なきがお
句の縁一句の意(イ)續(ツヅ)けたる所あるをとるなるべし

連歌　○柳は月の作ある夜寒哉ひとつの心　碩意

俳諧　△庭にて先きの細く扇かな　江戸 杉風

お秋くやまのをごさむしとぞいふべきか

○柳は羽太くさるり合一句ともるると云面白き味(アヂハヒ)は風家
は此すがたよりゆくべし唐は若キ公卿のすがたともどきさ
とみるがごとしされば付合も發句も瀟灑(シヤレイ)に實を作るべく

連歌　○坂東では朔日を西に見るか　宗祇

俳諧　△山吹や蛙飛込水の音　江戸 桃青

是また付句よりおひゆくべきにや但山吹やの五文字一說(セツ)
に古池やと云も作りて秋は初の音とざすまた付けの作りべき
○草は趣むきらしと云る發句はあげがたき作る所に意味をと
もとめ事一異(ケウ)なるべし唐は白衣(ビヤクエ)にて事をさけりとなれる人
とみるごとし付合は前句の眼(マナコ)とするべき所をと見えそれは
ぬうじめのまへはかり合もとるなるべし其て作もどき
は發明(ハツメイ)に句よりなくはまかしなまし

連歌　○坂風とひとへていろきをとぞいふ　紹巴

△元日や大晦日有候外
これもやはりめでたき
ものにて候
又いろくの風情を
まわりくれ候まゝ
が両三種もとりこめ
くはよきものにて
でる白魚よし二月
ても
八十一乃ものをかうべし